

## イギリス人記者の観た 戦勝国史観の虚偽

元ニューヨーク タイムズ東京支局長 ヘンリー スコット ストークス

<サマリー>

タダシ・ハマ, Ph.D

活気ある日本の生活を率直に観察しざっくばらんに書いているヘンリー ストークス氏は、最も長く外人記者・特派員として日本で活躍してきた。氏は、日本の過去の侵略は歴史的事実であるといわれている作り話を非難している。五十年以上も日本に暮らす間に、氏は日本のエリート層に多くの知己を得た。その中の一人に高名な小説家であり活動家でもあった三島由紀夫がいる。ストークス氏は三島の伝記「三島由紀夫の生と死」を著した。氏は三島と気軽に付き合うことができた唯一の外国特派員である。三島は日本が喪失してしまった「日本の真髄」とか「日本の独自性」など、日本にとって重大なことについて自由に語った。この日本が喪失したものの下には、欧米によって捏造され押し付けられた、戦後の歴史観と、日本にとってまったく異質の世界観に、すっかりがんじがらめになっている日本人がいる。

ストークス氏は戦時中の「慰安婦」問題や、いわゆる南京大虐殺など論争の的となっている歴史的問題を注意深く掘り下げ、事実を明らかにしていく。これらの論争が根強く続いている理由はいくつかある。中国と韓国が政治目的で発信する日本叩きの情報は大量に絶え間無く流されているので、その類の情報は容易に得ることができる一方、そういった様々な歴史的問題に関する正確な情報は、日本以外では無きに等しい。間違った情報や明らかな嘘の責任の一端は外国人にもあるけれど、責任のほとんどは日本人自身にある。日本人や世界の人々が事実(史実)をありのまま見るのを阻止するキャンペーンが行われているが、その前線に立って活動しているのは自虐的な職業的日本人活動家である。戦時中の「慰安婦」の場合、米軍の報告書では彼女らを「売春婦」「キャンプ・フォロワー」と報告しており、日本の慰安婦について米軍は把握していた、とストークス氏は指摘する。日本だけが特別ではなく、戦争中は米軍を含む他の軍隊も同じようなことをしていたのである。不幸なことに、自分を省みることなく他人を反道徳的だと攻撃するのは、売春などの問題によくあることだ。脛に傷持つ者が他人に石を投げつけるのは間違っている。

いわゆる南京大虐殺の場合、戦前の(蒋介石)国民党政府が行っていたプロパガンダは、西洋からアジアを解放しようとした日本の努力を無きものにする野望があった、と氏は指摘

する。腐敗しきって人心が離れていた国民党は、そのプロパガンダなくしては生き残れなかったのである。南京大虐殺が行われた、と言われている時期に、毛沢東も蒋介石も「南京虐殺」について何も言及していない。もし事実なら、「日本は悪魔のような悪逆非道な残酷行為を行っている」と世界に向かって叫ぶ機会はふんだんにあったのだ。1980年5月、韓国 光州の暴動で市街地での戦闘を報道した氏は、もしジャーナリストが南京でそのような場面に遭遇したら、何を見て何を報道するか、誰が誰を殺しているか、を報道したに違いない、と体験から説き起こす。だがそのようなジャーナリストは一人もいなかった。

未熟なものにとって、歴史は本当に思いもかけない真実であふれている。ストークス氏は証拠があっても意見を変えないような頑固な教条主義者ではない。その証拠に、北朝鮮の官僚の威厳に最初は感銘を受け敬意を抱いていたが、政治犯が積荷のようにトラックに詰め込まれるのをたまたま見てから、北朝鮮に対する好意的な見方を変えた。金大中が韓国の「民主主義」の広報官として崇められていた頃、金が実は陰険で二心のある性質の風見鶏であることをストークス氏は見抜いていた。ストークス氏は長年外人記者として活動してきた視点から、多くのことを教えてくれる。